片山哲著

大衆詩人

白樂天

岩波新書

261

片山　哲

1887年和歌山県に生まれる
1912年東京大学法学部卒業
現在—弁護士，賛育会病院理事長，中国文化研究協会会長，憲法擁護新国民会議議長，元内閣総理大臣，政界浄化公選連会長，日ソ文化協会会長
著書—「民主主義の回顧と展望」「人事調停法概説」「わが師わが友」「青い鳥を求めて」「安部磯雄伝」「わが心の愛読書」「回顧と展望」
訳書—グットスピード「ショートバイブル新旧二篇」

大衆詩人　白楽天　　岩波新書(青版) 261

昭和31年12月10日　第1刷発行 ©
昭和48年8月10日　第19刷発行

著者　片山哲

東京都千代田区一ツ橋2-5-5
発行者　岩波雄二郎

東京都青梅市根ケ布1-385
印刷者　白井倉之助

発行所　東京都千代田区一ツ橋2-5-5　株式会社 岩波書店

落丁本・乱丁本はお取替いたします　　精興社印刷・田中製本

（推薦の序）

白樂天

郭沫若

一

一九五五年十一月に片山哲先生が中國におみえになり、わたしもいくどかお會いしたわけであるが、會えばたいていの場合白樂天の詩が話題にのぼった。

片山先生は、「大衆詩人」としての白樂天を日本國民に紹介するためにいま筆をとっているのだという話をされた。そして白樂天の詩は、日本國民にもっとも親まれており、平安朝文學にひじょうに大きな影響をあたえた。しかし日本に傳えられた白樂天の詩には、花鳥風月をうた

ったものが多く、詩人のもっとも得意とした「新樂府」や「秦中吟」、閑適詩の類はかえって重じられなかった、と。

片山先生はまたこういわれた。白樂天の「新樂府」は働く人たちの苦しみをつたえた正義の叫びであって、そのなかの「母別子」や「時世粧」などは、その内容がいまの日本の現實とあまりちがわない。働く人たちの苦しみをうたったこのような詩人こそ不朽の詩人といわねばならない。白樂天は働く人たちに心から同情をよせていたし、人物も潔白で、私利私慾の觀念がすこしもない。彼のこうした心境は、閑適詩のようなものをみればよくわかる。白樂天こそ「大衆の詩人」であり、「働く人たちの幸福をいのった、平和の詩人」であり、「清廉潔白、毅然として自ら信ずるところにしたがった詩人」である、と。

片山先生はまたつぎのようにいわれた。自分がいま筆をとっているのはこのためで、自分としてはどうしても白樂天の眞面目、いままであまりかえりみられず、日本國民にもまだよく知られていないこの詩人の眞面目を紹介して、白樂天を全面的に理解してもらい、その詩のなかからくみとるべき教訓をくみとってもらいたい、また、こうした仕事が日中兩國の文化交流をうながす一助ともなればこれにこしたことはない、と。

白樂天にたいする片山先生の評價はまったく正しいし、この詩人の紹介にかけられた先生の期待にはふかい誠意がこもっている。片山先生はその勞作の序文をわたしにもとめられた。お

试读结束，需要全本PDF请购买 www.ertongbook.com

ことわりするすじはないので、よろこんでおひきうけした次第である。

二

白樂天は、わが國の文學史上でもリアリズムの立場にたつ偉大な詩人で、唐の德宗、憲宗の時代、つまり唐の「中興期」といわれる時代の人である。同時代の文學者としては、散文には韓愈や柳宗元があり、詩には白樂天をはじめ彼の親友の元微之や劉夢得がいた。このころ散文に劃期的な改革がおこなわれたが、詩にもおなじように劃期的な改革がおこなわれた。この改革の精神は主として六朝以後の形式主義のせまいわくから散文と詩を解放し、これをいっそう現實に近づけ、人民の側に近づけることにあった。

韓、柳による散文の改革は、彼らにつづく文學者たちによってふかく認識されて新しい發展をとげ、いわゆる唐宋八大家——韓愈、柳宗元、歐陽修、王安石、曾鞏、蘇洵、蘇軾、蘇轍——の文體は、そのご一千有餘年にわたって支配的な地位をしめてきた。蘇東坡から「文起八代之衰」とたたえられた韓愈は、中國のふるい時代をつうじてずっと尊敬をうけた。

だが元、白による詩の改革は、こうした隆盛をとげた散文の改革ほどには重要視されなかった。

三

元、白による詩の改革は、形式のうえの改革と内容のうえの改革というふたつの面をふくんでいる。形式のうえの改革は、詩歌をくだけたものにし、庶民の話し言葉をとりいれ、敍事的な要素をより多くとりいれるとともに、音韻の美しさを重んじて、誰にでもよくわかるものにするということであった。白樂天の「長恨歌」や「琵琶行」、元微之の「連昌宮詞」はともにこの改革の典型をしめすものであり、當時彼らのあとをしたった人びとは、はやくもこれを「元和體」とよんでいたほどである。

内容のうえの改革とは、つまり思想のうえの改革のことであり、詩によって人民の生活をえがき、人民の苦しみをつたえ、詩歌を社會改革の武器にしようとするものであった。これは上層の支配階級をたたえる詩をつくったり詩のための詩をつくったりすることの反對であった。この方面での典型的な作品としては、白樂天の「新樂府」をあげなければならない。新樂府の序文のなかには、「君のため、臣のため、民のため、物のため、事のために作るのであって、文のために作るのではない」という一句がある。これが元、白による詩の改革の基本的な主張であった。このことはつまり彼の作品が、社會的な政治的な目的をもって書かれたものであり、朝廷を諷刺し、時の政治を批判し、人民のために語り、人民の苦しみをうったえるものであり、

内容をもち、實際のなかから眞理をもとめようとするものにほかならなかったことを意味している。このような主張は、詩歌の革命ともいいうるものである。

唐の支配が開元、天寶のいわゆる「盛唐期」をすぎると、社會はいよいよ兩極端にむかってつきすすんでいった。上層の支配階級を代表する中央政府と地方の藩鎭は、搾取をほしいままにし、奢侈をきわめ、下層の被支配階級をますます貧困におとしいれた。とりわけ安祿山の亂がおきてからは、人民は流浪の旅をつづけ、にっちもさっちもゆかない破目に追いつめられた。こうして廣はんな人民は、改革をもとめ、革命をもとめるまでになっていた。

一時代前の詩人杜甫は、はやくもこうした要求を感得し、彼の詩は「詩史」の稱をえていた。元、白は杜甫をうけつぎ、詩の世界に意識的に改革の潮流をつくり出そうと企圖したのであった。ある時期に、彼らは勇敢に改革の主張を持出すとともに、その主張を實踐していった。白樂天の「新樂府」五十首はとりもなおさずこの詩歌革命の實踐であり、中國文學のなかに永遠の光りをはなつものである。

四

しかし元、白の詩歌革命は妨害をうけた。

彼らが創始した元和體は、「千字律」ともよばれ、ひろく民衆からよろこび迎えられたが、

一般の「莊士雅人」からは輕べつをもってむかえられた。こうした詩は、「莊士雅人に非ざる人の爲す所である」とか、ひどいのは「法を用いてこれを取締るべし」といいだす者さえあった（杜牧「李戡墓誌銘」參照）。

こうした形式のうえの改革でさえも、「莊士雅人」から輕んじられたり敵視されたりしたくらいだから、思想上の革命にもひとしい「新樂府」が、敢然として働く人民にかわって語り、支配階級に批判をくわえたことは、いっそう大膽不敵な行爲、政府にたてつく行爲といわねばならなかった。したがってこうした種類の作品は、元微之にしても白樂天自身にしても、いずれも危險をおかしてつくったことは確かで、白樂天の「新樂府」は五十首にとどまり、それいじょうにはふえなかった。こうした種類の作品について、元微之は令狐楚におくった手紙のなかに書いている。「詞直氣粗、罪尤是懼、固不敢陳露於人」これはいつわりのない氣持だとおもわれる。

これは無理のないことだった。封建的支配の時代に働く人民の苦しみを訴えて、人びとに封建的支配にたいする疑いを抱かせることは、とうてい許しておけない犯罪行爲となるほかはないのである。

形式上の改革である元和體が、「莊士雅人」から輕んじられながらも、これにならう人が出て、ある程度の發展をとげた一方では、革命的な意義をもった「新樂府」がほとんど完全に抹殺さ

れた理由はここにあるといわなければならない。

白樂天の「長恨歌」や「琵琶行」のような詩が、中國の舊社會で千年あまりもの間、人口に膾炙されながらも、「新樂府」や「秦中吟」については知る者がすくなく、日本でもこれとまったくおなじ事情にあったことの理由もここにある。

それからまた、文學の改革運動でならびたった元、白と韓、柳のうち、後者が後の世の人びとから、このうえもない尊敬をうけたのにたいし、前者がかなりの冷遇をうけた理由もここにあるといわねばならない。

理由はしごく簡單である。韓、柳の散文改革は、一種の改良主義にすぎず、彼らは古文の形式をもちいて封建主義の內容を宣傳した。封建的な支配階級が千年あまりもの間、彼らを歡迎してきたのは當然である。元、白の「新樂府」はいうまでもなく、彼らの「千字律」もまたひじょうに人民に近づいたものであって――「白樂天の詩はお婆さんにでもよくわかる」というのはみんなが知っている――「莊士雅人」の輕べつや敵視をうけないことのほうが、むしろ不思議なくらいである。

五

白樂天の閑適詩は、封建勢力の壓迫のもとにこの詩人が一歩後退したことを示すものとして

みなければならない。

だがこうした後退も、歴史的な見方からすれば、充分に同情すべきであって、責めることはできない。

こうした後退は明哲保身のためと解釋するよりも、むしろ濁った社會に迎合することをこころよしとしなかった詩人の高潔な心情を示すものといったほうがあたっている。

封建社會において、いっそうすすんだ生産力と新しい生産關係がまだあらわれないあいだは、よしんばその人が、どのように聰明であり、また現實の社會にたいして不滿を抱いていようと、彼は時代の制約をうけて、よういには社會發展の究極の姿をみてとることができないはずである。あるいはまったくみてとれないともいえよう。こうした人物の思想のなかにしばしばはげしい矛盾がおこるのはこのためであり、これらの人びとが悲觀して消極的になったり、閑居して世事に超然とした境涯をえらぶようになるのもこのためである。

白樂天はこうした方面でもひとつの典型を示している。

白樂天の社會思想は封建的支配者の思想とは根本的に對立するものであったが、さればといって封建制度をどうしようというわけにもゆかず、ときには一歩退いて妥協をもとめるほかなかったのである。白樂天はこうした氣持から老莊哲學や佛教思想の影響をうけ、これらの思想による影響のもとに閑適詩をうみ出したのであった。

试读结束，需要全本PDF请购买 www.ertongbook.com

わたしたちは、白樂天の閑適にはやむをえない事情があったとはっきりいうことができる。彼は働く人びとに同情をよせてはいたが、時代の制約をうけていたために、働く人びとの解放する道を見つけ出すことができず、「助けたい氣持は山々だがどうにもならない」という氣持から諦觀し、舊社會の波におし流されるかわりに超然自適の境地に立つことを願ったのであった。

彼自身の手で分類した閑適詩のなかに、「自蜀江至洞庭湖口有感而作」という一首がある。これは、彼が四川から揚子江をくだって巫峽をすぎ、洞庭湖のはんらんを目擊するにおよび、禹の治水上の功績に思いをはせて詠んだものである。その詩のなかにつぎのような句がある。

「安得禹復生，
　爲唐水官伯；
　手提倚天劍，
　重來親指畫！」

この詩は、彼が心服していた閑適詩人陶淵明の荊軻の詩とおなじように、彼の心境が閑適のために閑適しているのでないことをしめしたものといえる。

陶淵明にせよ白樂天にせよ、彼らの閑適は、濁った根強い封建社會にたいする無言の抗議であった。

六

白樂天についてのわたしの見方は、このように片山哲先生の見方と根本的に一致している。したがって片山先生が「民衆詩人」としての白樂天を日本國民に紹介し、とくに彼の「新樂府」や「閑適詩」を重くみて、これを日本語に譯されることは、まことに意義深いことといわねばならない。

すぐれた社會活動家である片山先生がこのように白樂天を重んじて、その詩にふかく共鳴されているというこのことは、先生が心から日本國民の幸福をねがい、平和を願い、日本の各階層の人びとが、「毅然有所自立」するのをのぞんでおられることをあきらかにするものであるとおもう。

片山先生のこうした氣持と實際の行動とはあたかも表裏一體をなしているといわねばならない。日本國民の平和憲法を擁護するための運動を指導されると同時に、中日兩國人民の友誼を深め、アジアと世界の永久の平和をかちとるためにたゆまず努力をつづけておられる片山先生のような平和の戰友にたいしては、わたしたちは心から敬意をささげないわけにゆかない。わたしたちは友好と協力をつよめ、世界の平和を守るためのわたしたちの共同の事柄が共同の勝利をかちとることをのぞんでいる。

片山先生が白樂天を紹介することで中日文化の交流をいっそううながしたいとのぞんでいられることは、疑問の餘地のないところである。人類社會は發展してついにこんにちの狀態にたちいたった。そしてこんにちでは全世界の進歩的な勤勞者がすでに自分自身の運命をみずから左右するようになり、兄弟のように手をつないで、輝かしい未來を目指す前進の道を切りひらいているのである。

わたしはこの機會を拜借し、平和と勤勞を愛する日本國民の方々に、祖國を愛し、奴隷化に反抗する日本國民の方々に、謹んで兄弟としての御挨拶を申上げる次第であります。

一九五五年十一月二十四日

まえがき

私は漢文にはまったくの素人である。ただおおまかに、李白（李太白）と白樂天（白居易）は、まことに氣持のいい、情熱の高い、また風格のあり、無慾の詩人と思い、深く尊敬し、その名詩を世界的な名文章と感服していたのである。乞わるるがままに、時々我流の揮毫に、その名調子の文字を拜借しておった程度であった。

たまたま數年前、舊友文學博士（英文學）齋藤勇君の著わす『杜甫』を手にし、齋藤君の樂しみに書いた本、餘技として著わした書物が、大變面白かった。そこで、何とはなしに私も白樂天の名詩を書きぬいてみることとした。

彼の文章の實に流麗であり、平明であること、しかもその內容が大衆にわかり易く、かつ近代的感覺に滿ちていることに、すっかり引きつけられた。讀めば讀む程、つきぬ興味がそそられるのであった。早速これらをとり纒めてみたところ、白詩（白樂天の詩）の特色と思われる個所が、はっきりと印象つよく浮び上ってきた。

すなわち、白詩には、時の政治をするどく攻擊した諷刺の詩の多いこと、戰爭に驅りたてら

れる大衆の反戰を歌う平和の詩や、重税にあえぐ生活苦から、薄命をかこつ婦人の爲に泣く悲しみの歌や、榮利をすてて悟りきった悠々自適の詩に至るまで、幾つもの名文章が、つぎつぎと出てくるのである。白樂天は、まことに正義と平和を愛するの大衆詩人である。

のみならず、彼は、我國平安朝文學の恩人であって、白詩ほど當時のわが文學に影響を與えたものは外にないと思われる。それはかれ獨特の平明にして玉のような名文が、我國に大いに受け入れられた爲ではあるけれども、それ以外に、彼の人物がさっぱりしていること、野望も邪念もない清白無慾の風格が、士臺となって歡迎せられるようになったと思う。彼は歌う、「酒を愛すれども名を愛せず、醒むるを憂うれども貧しきを憂えず、人間の榮利は洗い落すこと泥塵の如くす」と、愉快な詩である。

彼はまた愛情の溢るる詩人である。人を愛し、勤勞を尊重し、鶴の清楚な姿が氣に入ったとみえ、盛んに鶴を歌っている。山で拾った石の素朴を愛翫したなど、極めて多彩な愛すべき詩人である。

彼は思うがままに、自由に、形式にとらわれることなく、屈托することなく、ほとばしり出すように歌いつづけ、七十五年の長い生涯で、二千八百餘首という唐代第一の澤山な詩を殘している。

ところが、世の中はなかなか面倒なもので、唐末に於ても、元輕白俗などと惡口をいうもの

があったり、又、白詩は雅士の作る詩にあらずと非難するものがあったりなどした。この元は彼の親友、元稹であり、白は勿論白居易をさしているのであるが、又一部に於ては、次の解説をするものもあった。

「中唐の詩、韓（韓退之）孟（孟郊）白（白居易）元（元稹）を以て最となす、韓孟は奇警を尚び、つとめて人の意表に出ずることをいう、元白は坦易を尚び、つとめて人の共にいわんとする所をいう」と述べている。しかして、大多數の詩評では、白詩は「和平なり坦易なり」、これが今日までの定説である、私もこの定説によった。素人が白詩を取扱っても、敢て見當はずれていないであろうと思い、書き綴ることとする。

たまたま私は新中國を訪問し、要路の人々に會い、唐宋時代の文化、唐詩の話を時々の話題として、斷片的にきいてきた。殊に北京に於て郭沫若先生を訪問し、他の話に加えて、大衆的平和の詩人白樂天の詩を集め、これを日本の大衆に讀んで貰うようにしたいと考えている旨を述べたところ、同先生より冒頭の如き長文の序文を頂いた。これはまことに私の光榮とするところである。なほ郭先生より愛藏の「元白詩箋證稿」を譲って下さったこともうれしいことであった。

なお、北京に於て、長いあいだ唐詩の研究、さらにその英譯に專念されている篤學者のレビ

试读结束，需要全本PDF请购买 www.ertongbook.com